

宋代春秋学の史料性格

横山, 健一

<https://doi.org/10.15017/18220>

出版情報 : 中国哲学論集. 33, pp.23-41, 2007-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン :
権利関係 :

宋代春秋学の史料性格

横山健一

はじめに

中唐の啖助によつて起こされた春秋学の新潮流は、南北兩宋・金を經由し、元朝・明朝初期に至り、実質的な活動を終えたとされる。この春秋学——中心的な時代から宋代春秋学と仮称する——を解明しようとするならば、まずは現存の経部春秋類の書物（以下、単に注釈書と略称する）を分析することから始めなければならない。

しかし個々の注釈書は、宋代春秋学を構成する史料集合体の一つでもある。それら史料の存在理由の如何を問わず、読者の前に提示される史料の集合体は、自ずからそれ自体に一定の特質がある。随つて、現存注釈書の史料性格は、宋代春秋学を明らかにするべく、注釈書を全面的に利用し、その系統的理解を図った場合、宋代春秋学の理解そのものに深い影響を与えることになるであろう。それ故、宋代春秋学を明らかにするには、何よりもまず現存注釈書の基本的性格を予め知つておく必要が生まれるのである。

本稿ではこの現存注釈書の基本的性格の中、次の二点を明らかにする。まず現存注釈書は、仮定した所の宋代春秋学の最終時限、即ち明朝初期に現存していた注釈書に比して、どの程度の残存率であるかを明らかにする。そして、それを手掛かりとして、元朝の注釈書——明朝初期のものを利用しない理由は本論中に述べる——が包括する所の諸学説に対し、現存注釈書がどの程度残存しているかを明らかにする。この両者の探索によつて、現存注釈書を全面的

に用いた場合に得られる史料的性格の一端を明らかにし得るであろう。

なお、予め断つておくと、本稿の明らかにするものは、あくまでも現存注釈書に見られる書物と学説との関係である。随つて、そのような関係が何故に生れたかという歴史的ないし発生的問題は、固より考察の対象の外にある。

本稿に利用したテキストは、『通志堂経解』（同治）所収書はそれを利用した。それ以外で『四庫全書摘要』が存在する場合はそれを、その他は『四庫全書』を利用した。また『永樂大典』（以下、『大典』）は世界書局本（影印本）を利用した。その他、書名の「春秋」は適宜省略した。

一 現存の春秋注釈書

まずは本稿で問題とする経部春秋類の定義と、現存の注釈書、及びそれとほぼ重なる『通志堂経解』『四庫全書』所収書目を明らかにしておきたい。

本稿で扱う時代について、これは一般的な慣例に従い、中唐の陸淳三書（纂例・辨疑・微旨）以下、明朝の『春秋大全』までとする。宋代春秋学の終焉については、さらに延長して、胡安国『春秋伝』が科挙の指定書目から除外された清初までとすることも可能である。しかし、現在相継いで公刊される明朝期の書物の全貌を把握することは資料的に難しく、また明朝の経学そのものが未だ明白でないという現実的問題から、本稿では実質的な区分として『大全』成立までとする。

次に史料の種類について、これは原則として経部春秋類の単行書に限る。原則というのは、経部と史部とに出入する書物や、注釈書と同等とされる書物が存在するからである。前者は章沖の『左伝事類始末』が、後者は黄震の『黄氏日抄』がその代表として挙げられる。ただし単行書であっても、『文集』などに存在する「春秋論」の単行書や、古注の輯佚的書物は省いた。¹⁾これは春秋学と経部春秋類との関係が伝統的に密接不離にあるということ、及び分析範圍の極端な拡散を防ぐためである。

この範囲に於いて、現存の注釈書を明らかにするため、(一) まず最も多く注釈書を収録する『四庫全書』正目から——版本の問題は除外される——書目を抜き出し、基本的な現存書目を探り出し、そして(二) 四庫未収書を『通志堂経解』『古籍善本書目録』及び他の蔵書目録²⁾を持ち寄ることで、宋代春秋学の現存注釈書の実数を探る。これら以外にも、恐らくは稀覯本の類が幾つか存在するであろうが、現存の注釈書の概数はこれで計り得るであろう。

本稿末に添付した表は、本稿に説明する諸結果をまとめたものであるが、その中の表Aの「現」部を参照されたい。紙数の関係上やや複雑なものとなったが、「現」の中で、『通志堂経解』所収書は「通」を、それ以外の『四庫全書』所収書は「四」を、『四庫全書』中の大典本は「永」の印を付け、両叢書未収録で且つ現存注釈書には○印を附した。また『四庫全書』編纂時期まで現存していたことを重視し、『四庫提要』の存目部分の書目を表Bとして掲げ、「四」部に○印を附した。

これらの中、例えば杜謬『会義』は、四庫官が『大典』から輯佚しながら、『四庫全書』正存両目未収録となったという特例がある。また一般に利用の難しい楊簡『春秋伝』のような現存書も存在する。しかし、本稿の目的が現存注釈書の総体を探ることにある以上、それらの注記は割愛し、一律に現存書目群として扱っている。

表Aから、『四庫全書』所収書は、ほぼ現存注釈書に合致することが分る。そして『四庫全書』所収書は、相当部分を占める『通志堂経解』所収書と唐代経解書、『大典』輯佚本、及びその他の四庫官発見の稀覯本となる。ただし『通志堂経解』は、陸淳ら唐代の注釈書の外、胡安国『春秋伝』や蘇轍『集解』、『大全』など著名な注釈書は収録対象外となっているため、実質的に四庫官によつて発見されたものはごく少数に止まる。

以上が現存注釈書、及びそれと直接の関係を持つ『通志堂経解』『四庫全書』の状況である。

二 『永樂大典』所収の注釈書

『大典』は現存注釈書の重要な淵源の一つであるとともに、宋代春秋学の終結点に位置する編纂物でもある。この

中国最大級の類書は、皇帝御覧のため、文献の集成を目的として編纂された。随って、この『大典』所収書は、明朝初期に現存した主要学術書のほとんどを、少なくとも朝廷保有の書物のほとんどを、蒐集したものと言えるであろう。⁴⁾ 周知の通り、『大典』の大部分は散佚している。しかし幸いなことに、春秋の注釈書を収めた部分が、ごく少量ではあるが現存している。以下、それを利用することで、『大典』所収の注釈書を明らかにしていきたい。

『大典』目録によると、『大典』編纂当時に以下の注釈書が収録されていたことを確認し得る。

(一) 「秋」字の下に集められた春秋部。『大典』自卷九一六〇至卷九二二二)

(二) 『大典』中に散在する春秋字の措辞部。

(三) 隱・桓・莊……等の字の下に集められた十二公部。

この中、春秋部と措辞部の『大典』本文は全く現存しない。

まず(一)春秋部は、『大典』目録に書名らしきものが挙がっている。(表Bを参照)その中、趙汭『金鎖匙』が『四庫全書』正目に収録され、『透天関』が稀覯本として現存(残十一卷)しているが、他の書物は散佚した如くである。ただし一部は『四庫全書』存目に『提要』が存在し、⁵⁾ある程度の内容推測が可能である。それによれば、それらは時間的には金・南宋末以後、内容的には科挙と郷塾の教育書を中心とするものようである。

現存書が少なく断定は難しいが、『大典』目録に「年表」等の書名乃至項目があること、後述の十二公部には十二公通年の注釈書を多く収めていることから、春秋部には繋年の難しい特殊な形態をした注釈書、しかも科挙や郷塾の教育書といった低級の学術書、または年表などの工具書が収められたものと推測される。

次に(二)の措辞部は、「春秋書出奔」(卷三五一六)などの形で目録に見えるものであるが、書名は明記されておらず実体は不明である。⁶⁾固より推測の域を出ないが、十二公部にも措辞分析の書物が含まれていることから、措辞の専門書が収められたのではなく、措辞に言及した文献(文集所収論文など)が収められていた可能性がある。

最後の(三)十二公部は、隱・桓などの字の下に編纂されたもので、『大典』本文の現存する唯一の部分である。

現存部分は莊公の一部(卷六五〇四く六五〇五)と昭公の一部(卷五二九六く五二九七)である。なお十二公部は、

四庫官が『大典』輯佚書を作った際、僖公十四年秋から末年まで、及び襄公十六年夏から末年までを失っていた外、完全な状態で保存されていた。^⑦

現存の『大典』部分を通覧するならば、そこに引用された書物は、胡安国『春秋伝』のような十二公繫年の注釈書の外に、劉敞『伝説例』の義例分析、斉履謙『諸国統紀』の国別分析を含んでいる。それ故、十二公部に収録された注釈書は、最も一般的な経部春秋類の書物であったと見なし得る。

また十二公部引用の注釈書は、一定の規格の下、系統的に収録されていたことも知られる。現存部分を整理して著者名と書名を挙げると以下のようなようになる。なお「」は『大典』の細字を指し、煩を避けるため書名の二重括弧は省略した。また推測可能な書名は〈 〉内に補った。

①「周王年及び甲子」年「諸侯の年」経文「経に対する左伝注疏、公羊注疏、穀梁注疏、陸徳明の釈文、林堯叟の句解」

②左氏伝、杜預注、及び正義。陸徳明の釈文。魏了翁の要義。林堯叟の句解。陳傅良の章指。葉夢得の左伝讖。呂祖謙の伝説。同統説。同博議。洪皓の紀詠。敬鉉の統屏山杜氏遺説。趙沔の補注。③公羊伝、何休注、及び公羊疏。葉夢得の公羊伝讖。洪皓の紀詠。④穀梁伝、范寧注、及び楊士助疏。葉夢得の穀梁伝讖。〈洪皓の紀詠〉

⑤程頤の伝及び程子遺書。⑥胡安国の伝。汪克寛の纂疏。⑦張洽の集註。

⑧繁露。

⑨春秋総義類

『大典』の区分に従うならば、まず①の経文、次に②③④の三伝とその解釈・批判部分、第三に⑤程頤の『春秋伝』及び『河南程氏遺書』春秋言及部分、および程頤私淑の弟子である⑥胡安国の『春秋伝』、朱熹の弟子である⑦張洽の『春秋集註』という朱子学系統の注釈書群、第四に⑧『繁露』の春秋外典的書物、最後に⑨の中唐の陸淳から明朝初期までの一般的な注釈書、所謂春秋総義類の、五つの種類が見つけられる。^⑧

この②⑦及び⑨の注釈書に、上記未見の『四庫全書』大典本を加えたならば、現在確認し得る『大典』所収書を

確定できる。しかし『大典』残存部分の不備と、明朝の主要典籍をすべて収めたとされるその性格を考慮し、ここに明朝初期の宮廷蔵書目である『文淵閣書目』春秋部分を持ち寄ること、『大典』所収書を中心とした、明朝初期の現存注釈書の一覧を作ったものが、表Aの「永」部である。

「永」部の中、○印は『大典』十二公部記載のものを、△印は『四庫全書』大典本で上記②③⑦及び⑨に見えないものを指す。また『文淵閣書目』記載の書目で、十二公部と『四庫全書』大典本とに未記載のものは「文」を加えた。十二公部の残存部分は僅少であり、また『文淵閣書目』も完全な蔵書目ではない。しかし宮廷蔵書を代表する『文淵閣書目』と『大典』引用書との重複書目は多い。これは現存部分から確認し得た『大典』引用書に大幅な欠落がない証左ともなる。随つて、附表「永」によつて明朝初期の注釈書の相当数を復元し得たことになるであらう。なお『大典』『文淵閣書目』収録書目の中、現存しない書物は以下のように分類できる。

(一) 三伝に対する注釈書——陳傳良『左氏章指』、洪皓『紀詠』、敬鉉『統屏山杜氏遺說』、『左伝羅氏節』。

(二) 入門書的な書物——『左伝法説』、『左氏広晦蒙』、孔克『左伝本末』。

(三) 一般的解釈書——敬鉉『春秋備忘』、梁寅『考義』、李衡『集説』、崔植『伝節』。

(四) 義例の分析書——胡安国『通例』と『年表』(不詳)、方案『断例』、高允憲『書法大旨』。

この中、『左氏章指』『紀詠』『左伝法説』『通例』は宋代の、敬鉉の著作は元朝の、他は明朝初期の著作である。以上の諸結果と前章の現存注釈書とを比較するならば、次の結論が得られる。即ち、明朝初期に存在した注釈書の中、元朝以前の注釈書はほぼ現存するが、明朝初期の注釈書は現存しない。換言すれば、元朝以前の注釈書に限るならば、現在利用し得る注釈書は、明朝初期に存在した注釈書であるということにもなる。

もつとも、これは当然の結果である。そもそも明朝初期に『大典』が編纂されたとき、そこには当時の著明な経解書はほとんど収録された。そして『大典』は、『四庫全書』成立時には八割余り残存していた。まして十二公部については、全二百四十二年中、三十余年の欠落を除き、ほぼ完全な形で残っていたのである。

四庫官が『四庫全書』を編纂した時、宋元時代の経解書に対して、刊本・鈔本として流伝していたものはそれを正

目に入れ、現存しないものは『大典』から輯佚して正目及び存目に残し、明朝のものは破棄した。もちろん、そこにはテキストの改竄があり、復元作業に問題もあつたであろうし、劉敞『説例』のごとく『大典』所収書そのものに欠落のあつたものも確認できる。しかし書物の大体が保存されたことは否定し得ない。ならば『四庫全書』を利用し得る現時点に於いて、現存する元朝以前の注釈書は、当然ながら明朝初期の注釈書を中心としたものでなければならぬのである。

さて、現存注釈書の中、少なくとも元朝以前のものは、ほぼ明朝初期の注釈書に匹敵するものであつた。そこで次に、この条件を利用して、元朝の注釈書から引用学説を探索することで、現存注釈書を分析した場合に得られる諸学説と、現存注釈書との関係を探っていきたい。

三 元朝注釈書の所収学説

宋代の春秋学には一つの特徴がある。それは『春秋正義』のごとく、一つの注解の正当性を説明する形態の注釈ではなく、多くの学説を織り交ぜながら自己の注釈作業を行ったことである。集伝・集注・集解などの書名で知られる書物はその典型である。^①この傾向は時代が降れば下るほど甚だしくなり、元朝の注釈書には、三伝注疏以来の夥しい先行学説が引用されている。

既に見た如く、明朝初期に生産された注釈書は現存しない。しかし、実質的に明朝初期に連続する元朝時期の注釈書は現存している。ならばこの宋代春秋学の注釈形態を利用することで、元朝期の諸学者が利用した先学者並びに先行注釈書——広い意味での先行学説を探り得るであろう。

この分析には以下の制約がある。まず元朝の注釈書を利用する問題上、分析可能な時期が南宋以前に限られ、同時代の元朝は省かれる。次に注釈書引用の学説という性格上、図説・年表の類は引用が見られないか、見られても制約があると想像される。随つて、十二公繫年のような春秋経文に繋げ易い諸解釈が多く発見されることになる。

また元朝の注釈書には、明白に当時すでに佚していた書物——漢代の注釈書など——を引く場合がある。これは先行書籍から孫引きしたことによると推測されるが、恐らく中唐から南宋時期の学説に対しても同様のことが想像される。

これらは確かに分析結果の意味の幅を狭めるものである。しかし諸学説を参照する元朝の注釈書の引用学説を整理することは、彼等にとつての必見の学説を探ることにもなり、元朝の注釈書が必須とした主学説の抽出には役立つであろう。もちろんここにいる主学説とは、各経文に対する解釈や尊王説などの具体的な学説ではなく、批判するにせよ肯定するにせよ、とにかく一言を必要とした人物や著書という意味である。

これらを前提として、元朝の注釈書の中、分析に適した書物を選ぶと、次のものが得られる。呉澄『春秋纂言』、俞皋『春秋集伝釈義大成』、程端学『春秋本義』、鄭玉『春秋経伝闕疑』、李廉『春秋諸伝会通』、趙汭『春秋集伝』である。今回はこれに宋末の黄震『黄氏日抄』の春秋部分（巻七、十三）、汪克寛『胡伝附録纂疏』引用姓氏を附加して先行学説の補強に努めた。¹⁵ なお論ずるまでもなく、これ以外にも元朝の注釈書は存在する。程端学には他に『辨疑』『或問』があり、趙汭には『属辞』『左氏補注』があり、各々先行学説を収めている。しかし全体として上記諸書の引用書目を越えないため、本稿では煩雑を避けて上の八種に絞った。

分析の凡例として以下の七点を挙げる。(一) 期限は、三伝を除き、中唐から南宋までとする。(二) 一経文に複数回同一学説を引用する場合は、便宜上、一経文一回の引用と見なした。(三) 引用書が原則的に利用する注釈書——李廉『諸伝会通』に於ける三伝及び胡氏伝、陳傳良『後伝』、張洽『集註』——は、○印を以て引用条数に代えた。(四) 引用条数については、原著の場合はそこに、複数の著書をもつ場合は人物に繋げた。これは元朝の注釈書の通例を考慮したものである。(五) 引用学説の中、現存注釈書がなく、出处不明の学説は、推定の書名を○内に記した。(六) 注釈書以外からの引用、また極度に引用が少なく且つ著者の明らかでない学説は、煩瑣を避けるべく省略した。(七) 汪克寛『纂疏』は胡安国『春秋伝』の注釈であるため、引用条数は記さず、同書の引用姓氏記載の人名に○印を附すのみとした。

以上の書物の引用書目とその条数を調べ、それを総計したものが、表Aの「呉」（呉澄）、「俞」（俞皋）、「程」（程

端学)、「鄭」(鄭玉)、「李」(李廉)、「汪」(汪克寛)、「趙」(趙沄)、「黃」(黃震)である。また各注釈書の引用条数は、引用書の誤植や注釈者(作伝者)の誤謬のほか、底本によつて変動があるため、ある程度の目安に過ぎない。なお背景が薄灰色のものは未現存の注釈書を指す。

さて、引用学説と現存注釈書とを比較するならば、思いの外、多くの人物や書目が重複している。未現存の注釈書の中、陸淳から孫復・胡瑗以前の学説のほとんどは、杜諤『会義』引用部分と合致する¹³⁾。これと同様の例は、謝湜と許翰についても言い得る。前者は李明復『集義』に全文が収められており、後者は呂氏『集解』引用部分とほぼ合致し、両者ともに現存注釈書から引用学説をほぼ明らかにすることができる。随つて、やや変則的ではあるが、元朝の注釈書の引用学説は、附表に現われた以上に、現存注釈書と重複しているのである。

さらに引用回数が多い学説(学者や書目)が限定されていることも知り得る。具体的には、中唐の陸淳、北宋の孫復、劉敞、孫覺、程頤、蘇轍、許翰、南宋の胡安国、高閔、薛季宣、呂氏(呂本中、呂祖謙)、陳傅良、張洽などがそれである。この中、許翰や薛季宣のように注釈書の現存しないものもあるが、引用頻度の高い学説は基本的に現存注釈書に含まれている。

ちなみに南北両宋と明朝初期の注釈書の中から、以上の引用書目以外の引用書を探索すると、先行学説を引くことが多い南宋の張洽『集伝』(宛委別藏)所収)には景氏(景先之?)が存在し¹⁴⁾、石光霽『書法鉤元』にその師張以寧の学説が引かれ、また北宋の杜諤『会義』には附表の陸淳から孫復の間の学説が若干存在することを発見でき、随つて佚文も増える。しかし概数としては、書目の種類は表Aに示したものを大きく越えない。

元朝の現存注釈書から引用書目を抽出した結果を見ると、その主要引用書目と現存書目とは重複するものが多い。随つて最も単純な意味からすれば、元朝期の主要注釈書に引かれた学説の大半は、原典が存在する。

もちろん、現存注釈書の一部は『大典』輯佚書に繋り、随つて部分的残存に過ぎない。また版本的な不安もある。しかし、既に見てきたように、『四庫全書』編輯の状況からいって、大部分の現存注釈書については、内容上は原典としての本質を残していると言い得るであろう。

さて現存注釈書、『大典』所収書目、元朝の注釈書所引学説を探究し、そして各々の関係を論じてきたが、それならばこれら現存注釈諸書や諸学説は、そもそも如何なる関係の下に捉えられるのか。最後にこれについて附言しておきたい。

四 現存注釈書の分布

現存の注釈書は『大典』引用書目にほぼ等しく、元朝の注釈書の所引学説のかなりの部分はまた現存注釈書に包括される。これにはどのような意味があるのであろうか。

まず端的に気付くことは、南宋以後の注釈書の大部分は、元朝の斉履謙『諸国統紀』や敬鉉の経解書など、華北で生産された例外的な書物を除くと、江南地方の産物であるということである。そして中唐から北宋の注釈書は無秩序に残存しているものの、その残存注釈書（即ち学説）は、南宋以後の江南の注釈書に吸収される関係にある。

換言すれば、中唐の陸淳等以来、北宋で生産された学説は、金朝を経由せずに南宋に吸収され、さらに元朝江南地方に集積され、それが明朝初期の朝廷に堆積したもの——そのような関係の上に現存注釈書は存在する。

この中唐・北宋・南宋・元朝江南地方という径路は、元朝江南地方や明朝初期の学者にとつては、少なくとも本稿で検討した学者達には、そのまま春秋学の発展径路であつたはずである。もちろん金・元関係の人物の中にも都合のよい事例を見つけることはできる。敬鉉という人物である。

敬鉉はその子儼の伝記（『元史』卷一百七十五）から、金朝・元朝という学脈を持つ人物であることが知られる。

『大典』十二公部に残された僅かな彼の著書『備忘』本文から、その引用書目を引くと、三伝注疏、啖助、趙匡、李堯俞、孫復、石介、劉敞、蘇轍、黎錡、程頤、師協、任公輔、胡安国、趙鵬飛の学説を引いたことが知り得る。

ならば金・元という径路を辿つた敬鉉は、北宋以前の学説を中心としつつ、それに継ぐに金朝や華北の学説ではなく、南宋の胡安国・趙鵬飛の学説に代表される北宋・南宋の学説を以てしていたことになる。ただし敬鉉には別に『続屏山杜氏遺説』という書物がある。これは書名の如く、金朝の李純甫『遺説』の続編を目指したものと推測され

る。随つて敬鉉に金朝の学脈が全くなかったわけではないが、全体としては元朝江南方面の学者と同様の路線に立っていたことは認められるであろう。

確かに、北宋・南宋・元朝江南地方・明朝初期という一連の関係は、実際に注釈書を分析する場合、読者に一つの安心感を与える。読者が実際に現存注釈書を繙いた場合、中唐や北宋の多くの学説は南宋の学説の前提となっており、それらの学説は元朝に至り整合的に批判・分析されていることに気付く。あるいは逆に、南宋末から元朝の注釈書を利用して、彼等の参照した学説を求めるならば、そこには特定の人物や書物があり、その多くは著書が現存しており、重要学説であったが故に残存していたような感覚を与えられる。それら特定の人物や書物、学説を中心に宋代春秋学は展開していたような感覚に襲われる。随つて、読者は、それら特定の人物や書物、学説を扱つたならば、一貫して宋代春秋学を分析し得た安心感を与えられるのである。

宋代春秋学を明らかにするべく、より現実に即して考へるなら、現存注釈書を利用せざるを得ない。そして宋代春秋学を最も包括的に分析しようとするならば、差し当たつて設定した期間、即ち中唐の啖助以来、明朝初期までの現存注釈書を、可能な限り密接に有機的、関聯の下に分析せざるを得ない。それが密接であればあるほど、中唐や北宋の学説を南宋の学説に、そして南宋の学説を元朝や明朝初期の学説に収斂させていく形態に、宋代春秋学中の全学説を系統的に整理しようとする。このときに一貫して意味を与えられ続けた学説、即ち一般的学説とでもいうものが成立する。

それは時間的・空間的には北宋・南宋・元朝江南地方・明朝初期という関聯を指し、学説的には中唐の陸淳、北宋の孫復、劉敞、孫覺、程頤、蘇轍、許翰、南宋の胡安国、高閔、薛季宣、呂氏、陳傅良、張洽などの人物や著書を指すことになるのである。

もちろん注釈書の分析のみが宋代春秋学を解析する方法ではない。通常は多くの関係文献を参照してその全貌の解明を期すものである。また他の経学、朱子学、史学等々の他分野からの接近によつて、宋代春秋学の規定はある程度可能であろう。あるいは該当する問題に対して最も有効な分析を加えていると判断できるならば、それが如何に異なる注釈書であろうと利用し得る。随つて、史料上の一般的学説たると否とは問題にならないと言ひ得るようにも見える。

しかし、現存注釈書こそは、宋代春秋学を最も高度に、そして最も史料に即して明らかにするものである。その現存注釈書が、総体として一般的学説を導く以上、宋代春秋学の特徴を導く視角や問題設定そのものが、一般的学説によつて決定されることになる。

例えば、宋代を代表する学説である孫復の尊王説、劉敞の義例批判、胡安国の華夷論、あるいは陳傅良の世変説などに對し、現存注釈書を繙きその関聯を調べるならば、当然ながらそこからそれら諸学説の展開・批判・屈折等々を導くことが出来る。これらをより周到に分析すればするほど、宋代春秋学に於ける孫復等の学説をより厳密に意味づけることになるであらう。

しかしそれは、そもそも現存注釈書が濃密な関聯を作り出している故に、即ち孫復等の学説が一般的学説たり得ているからに過ぎない。孫復等の学説を、宋代春秋学の名に於いて意味づけるのであれば——宋代春秋学外の、例えば該当時代の思想的なものに關連させるようなことをしない限り——これは避けられない。

これに對して、例えば『経義考』から検し得る限りの、五百とも六百とも数え得る宋代の春秋経解の残存史料から、孫復等と異なる学説を發見した場合、それは孫復等の学説に對する形に於いて、宋代春秋学上に異質であるという意味を与えられる。逆に一般的学説に洩れる無名の学者が尊王説に對する高度な分析を行つていようと、その分析の對象たる尊王説の重要性は、一般的学説によつて決定されているのである。

もしこれに反して、一般的学説を前提とせずに、時間的空間のない諸学説の關連とは無關係に、読者が特定学者ないし学説に価値を附与したならば、それは何等史料の根拠を持たぬ読者の独断的判断になるであらう。

現存注釈書は史料と学説との強い相關關係の下に存在する。史料構成上に於いて孫復等の学説は当初から一般化されておき、常に読者に安心感を与え続けるのである。随つて、宋代春秋学の實際——實際というものが存在すればであるが——が如何なるものであれ、孫復等の学説は史料上では一般的たり得、随つて異質な学説は孫復等の一般的学説に對する形に於いて、はじめて宋代春秋学上に意味を与えられるのである。

つまり中唐以来、明朝初期までを宋代春秋学として決定したその瞬間、宋代春秋学を代表する注釈書は決定される。

そして史料としての注釈書は、当初から、中唐・北宋・南宋・元朝江南地方・明朝初期という径路を、あるいは中唐の陸淳、北宋の孫復、劉敞、孫覺、程頤、蘇轍、許翰、南宋の胡安国、高閔、薛季宣、呂氏、陳傅良、張洽という有機的關聯をもつ学説群を、読者の前に現すことになるのである。

もちろん、分析対象の範圍を宋代よりも拡大し、または春秋学上の義例や措辞などの特定学説のために、あるいは春秋学外の問題のために、現存注釈書を利用するならば、如上の關係は当然破られる。ただそのときにはまた、各々を解析するための、新たな史料上の關係が生まれるだけである。

小結

仮に中唐以来、明朝初期までを宋代春秋学と仮定したならば、その最終段階である元朝から明朝初期にまで残存していた春秋の注釈書は、ほぼ現存する注釈書に等しく、またその最終段階に顧慮された諸学説も、現存する注釈書に包括される。

単純に如上の意味からするならば、現存する注釈書は、明朝初期まで散発的無秩序に残存していたわけでも、また偶然孤立的に残存していたわけでもない。中唐・北宋の学説を前提とし、そこに南宋（金朝を除く）から元朝江南地方の学説を集積したものの代表として、密接な關聯の下に残存しているのである。何故残存したのかという歴史的意味の有無はともかく、少なくとも結果として、そのような形になっているのである。

随つて、現存の注釈書を精読すればするほど、あるいは史料に忠実であればあるほど、本論中に示した中唐から明朝初期の学説の束を導き出すことになり、そこに歴史的意味を附与することになる。しかし、そのような歴史的意味付けは、如上の学説の束から導いただけであるならば、歴史の実際——實際というものがあればであるが——とは無關係のものである。それは宋代春秋学という時間を区切ったときに生まれる史料上の制約によつて、当初から證明されるべくして證明されたものに過ぎないからである。

しかし、もし史料の證明によって宋代春秋学を明らかにしようとするならば、歴史的事実の有無とは無関係に、如上の結論が、常に歴史的真実に対する前提として立ち現れる。随つて、史料の偏向によって得られる結果であるとするに關わらず、現存注釈書の分析から得られる結果を以て、仮に、宋代春秋学の重要学説を定めざるを得なくなるのである。無論、現存注釈書こそが宋代春秋学であると、ごく常識的に規定するのであれば、現存注釈書を分析することで得られた結果は、そのまま宋代春秋学の重要学説になる。

宋代の春秋学を説明しようとするとき、経学的立場であれ歴史の立場であれ、もし史料上の證明を必要とするのであれば、附与されるべき歴史の意味はひとまず置き、対象とされる史料そのものの特質を明らかにしておく必要があるであろう。本稿はそのための一つの試みである。

〔注〕

(1) 具体的には、『現存宋人著述総録』（巴蜀書社、一九九五年）に単行書として数える晁補之『春秋左氏伝雜論』や王忠麟『古文春秋左伝』などを指す。

(2) 本分析に用いた書目は、本文記載の目録の他、前掲『現存宋人著述総録』、『四庫全書存目叢書』、『続修四庫全書』、『内閣文庫漢籍分類目録』である。

(3) 宋代の注釈書で特殊なものを挙げておくと、程頤『春秋伝』は『河南程氏経説』に、胡元質『摘奇』と張洽『集伝』は『宛委別藏』に、また呂祖謙『類編』は『四部叢刊』続編に所収されている。全くの稀覯本は、劉綯・胡銓・楊簡・李厚の四著作に限られる。杜諤『会義』については、拙論「杜諤の『春秋会義』について」（『九州中国学会報』第四五卷、二〇〇七年）を参照。

(4) 『永樂大典』については、前掲拙論の注八を参照。

(5) 『提要』の存在するのは『握奇図』『経義問対』『合題著説』『透天関』『麟経指南』のみ。

(6) 『大典』目録に見えるものは、「春秋書如」（卷二〇六九）、「春秋書帛」（卷二七〇四）、「春秋書出奔」（卷三五一六）、「春

秋書廟」（卷五三六一）。恐らくは廟は朝の誤、「春秋書遂」（卷一五二〇九）、「春秋書会」（卷一五二二九〜一五三二一）、「春秋書廟」（卷一七一六八）、「春秋書殺」（卷二二三四〜二二三三五）、「春秋書伐」（卷二二七〇〜二二七四）、「春秋書月」（卷二二四八二）である。

(7) 「自僖公十四年秋至三十二年、襄公十六年夏至三十一年、『永樂大典』并闕。」（『四庫提要』、崔子方『春秋經解』）他に戴溪『春秋講義』、洪咨夔『春秋說』の『提要』を参照。但し大典本は、『黃氏日抄』などで補入される場合があり、上記の区間に全く解釈文がないわけではない。

(8) 十二公部には、注釈書以外にも僅かに引用書が存在する。現存部分には「宋史堯弼集」「溪堂先生文集」が見える。

(9) 『左氏章指』は『四庫全書』纂修当時、『大典』に相当数残っていたが、四庫官の判断から輯佚が断念された。（『四庫提要』陳傅良『後伝』）敬鉉『統屏山杜氏遺說』は、李純甫『遺說』（左伝杜注の解釈書）の統編という意味であろう。『左伝羅氏節』は『内閣藏書目』の「羅文左傳」と同書と見なし得るならば、『内閣藏書目』同書注の「即ち杜預の注」に従い、左氏伝杜注と見なし得る。

(10) 『左伝法説』の書名は、読画齋叢書本『文淵閣書目』に従ったものである。四庫本『文淵閣書目』は『春秋左伝法語』に作る。『法語』であれば、『書録解題』（卷十四、類書類）に「左伝法語六卷」がある。『左氏広晦蒙』、孔克『左伝本末』は不明。

(11) 拙論「宋代春秋学と解釈文の創作」（『中国哲学論集』第三一・三二合併号、二〇〇六年）を参照。

(12) 本分析に用いた底本は以下の通り。『纂言』（四庫本）、『釈義大成』（會要本）、程端学『本義』（通志堂本）、『闕疑』（會要本）、『諸伝会通』（會要本）、趙汭『集伝』（通志堂本）、『黃氏日抄』（乾隆三十三年刊本、中文出版社影印本）、『胡伝附録纂疏』（四庫本）である。底本として最善とは言えないが、筆者の利用の便から上記の選定となった。

(13) 前掲拙論「杜諤の『春秋会義』について」参照。以下の杜諤についても同じ。

(14) 隠公五年の初猷六羽、桓公二年の宋督弑其君与夷及其大夫孔父に見える。

表 A

	著者	本貫	書名	現	永	吳	俞	程	鄭	李	汪	趙	黃
三傳	—		左氏傳	—	—	912	○	556	35	○	○	189	407
	—		公羊傳	—	—	113	○	120	119	○	○	157	74
	—		穀梁傳	—	—	108	○	92	164	○	○	211	72
唐	陸淳	蘇州	纂例、微旨、辨疑	四	○	145	41	137	97	129	○	19	13
	盧仝	洛陽	(摘微)					1			○		
	陸希聲	蘇州	(通例)			1		2					
	李瑾	—	(指掌義)								○		
	陳岳	吉州	(折衷論)			4		5			○	2	
	馮繼先	—	名號歸一圖	通									
—	—	年表	通										
北宋	王洽	大名	(集傳箋義)			8		13			○	7	
	宋堂	成都	(新義)			1		5			○		
	李堯俞	成都	(集議)			5		6				4	
	齊賢良	—	(旨要)			4							
	陳洙	—	(索隱論)					3				1	
	何涉	順慶	(本旨)					1			○		
	孫復	晉州	尊王發微	通	○	119	25	180	49	6	○	40	36
	胡瑗	泰州	(口義)			1		38	28		○		23
	孫抃	眉州									○		
	石介	兗州	(說)			4		18	3				2
	黎錞	廣安	(經解)					6		1	○	1	7
	王哲	太原	皇綱論	通	文								
	徐晉卿	—	類對賦	通	文								
	劉敞	臨江	權衡、傳、意林	通	○	71	11	101	75	44	○	45	37
	同	同	傳說例	永	○								
	師協	—	(解)			7	1	9	90				5
	孫覺	高郵	經解	通	○	35		125	155	2	○	8	10
	程頤	河南	傳	○	○	72	225	78	147	51	○	18	27
	蘇轍	眉州	集解	通	○	43		16	27	9	○	9	13
	朱長文	蘇州	(通志)					1			○		
劉本	福州	(中論)								○			
任公輔	—	(明辨、集解)			19		26	2		○		7	
崔子方	涪州	經解、例要	永	○			4				1	41	
同	同	本例	通	文									
杜諤	眉州	會義	○	○	33		29				4		
馮山	普州	(通解)										1	
陸佃	越州	(後傳)					2						
劉絢	真定	通義	○		16		29	32	8	○	1	3	
蕭楚	吉州	辨疑	永	△									
張大亨	湖州	五禮例宗	四	文									
同	同	通訓	永	○									
王當	眉州	列國臣傳	通	文									
謝湜	懷安	(義)						242	35				
許翰	拱州	(集傳)			135		61	109	15	○	13	43	

	著者	本貫	書名	現	永	吳	俞	程	鄭	李	汪	趙	黃	
南宋	胡安國	建寧	傳	四	○	212	○	275	520	○	○	61	51	
	同	同	通例、年表		文									
	葉夢得	蘇州	—	—	—			88				7	21	
	同	同	傳	通	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
	同	同	考	永	△	—	—	—	—	—	—	—	—	
	同	同	讖	永	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
	洪皓	饒州	紀詠		○									
	高閌	明州	集註	永	○	561		330	416		○	48	58	
	余安行	饒州	(新傳)			3		1					1	
	王葆	平江	(集傳)			2					○	1		
	洪興祖	鎮江	(本旨)								○			
	胡元質	平江	摘奇	○	文									
	胡銓	吉州	集善	○				99				3	6	
	鄭樵	興化	(地名譜、傳、考)				25	5			○	1	36	
	林之奇	福州	(通解)									2		
	楊甲	昌州	圖說	○	文									
	章冲	湖州	左氏傳事類始末	通										
	薛季宣	温州	(經解、旨要)			17		7	51	2	○	10	3	
	林堯叟	—	左傳句解	○	○	2					○			
	同	同	左伝句讀直解	○										
	呂氏	—	—	—	—	34	7	73	43	9	○	1	21	
	呂祖謙	婺州	左氏傳說	通	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
	同	同	左氏傳續說	永	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
	同	同	東萊博議	四	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
	同	同	集解	通	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
	同	同	左傳類編	○	△	—	—	—	—	—	—	—	—	
	陳傅良	温州	後傳	通	○	9	15	46	129	○	○	219	20	
	同	同	左氏章指		○					1		1		
	劉朔	興化	比事	四	文			1			○	1		
	程迥	應天	(解、顯微目例)			32		1		1	○		1	
	陵陽李氏	隆州				3					○			
	楊簡	慶元	傳	○	○									
	魏了翁	邛州	左傳要義	四	○									
	程公說	眉州	分記	四	文	5								
	戴溪	温州	講義	永	○			30				2	180	
	李明復	合陽	集義	四	○									
	張洽	臨江	集註	通	○	381	10	344	117	○	○	21	80	
	同	同	集傳	○		—	—	—	—	—	—	—	—	
	李琪	平江	王霸列國世紀編	通	文						○			
	黃仲炎	温州	通說	通	○									
	洪咨夔	杭州	說	永	○									
	趙鵬飛	綿州	經筵	通	○			67				5	376	
王宗諭	四明	(傳)					85				3	23		
家鉉翁	眉州	集傳詳說	通	○			2	318		○	15			
黃震	慶元	日抄	○	○			58	1			7	—		
呂大圭	南安	—	—	—	15		47	57		○	3			

	著者	本貫	書名	現	永	吳	俞	程	鄭	李	汪	趙	黄
	呂大圭	同	或問	通	○	—	—	—	—	—	—	—	—
	同	同	五論	通	文	—	—	—	—	—	—	—	—
	陳深	平江	讀春秋編	通	○								
元	俞阜	徽州	集傳釋義大成	通	○								
	陳則通	—	提綱	通	文								
	敬鉉	易州	續屏山杜氏遺說		○								
	同	同	備忘		○								
	吳澄	撫州	纂言		四	○							
	朱申	江陰	左傳句解		○								
	齊履謙	大名	諸國統紀	通	○								
	程端學	慶元	本義、或問	通	○								
	同	同	三傳辨疑	永	○								
	王元杰	—	讖義	四	○								
	李廉	吉州	諸傳會通	通	○								
	鄭玉	徽州	經傳闕疑	四									
	梁寅	臨江	考義		○								
	汪克寬	徽州	胡傳附錄纂疏	四	○								
	趙汭	徽州	集傳、屬辭、補註	通	○								
	同	同	師說	通									
同	同	金鎖匙	四	○									
明	張以寧	福州	春王正月考	通									
	石光霽	泰州	書法鉤元	四	文								
	方宗	—	斷例		○								
	奉敕撰	—	本末		○								
	李衡	—	釋例集說		○								
	崔植	—	傳節		○								
	高允憲	—	書法大旨		文								
	胡広等	—	大全	四	文								
不明	不詳	—	通義	四									
	李厚	—	總要		○								
	不詳	—	左傳羅氏節		文								
	不詳	—	左傳法說		文								
	不詳	—	左氏廣晦蒙		文								
	孔克	—	左傳本末		文								
不詳	—	通天竅		文									

凡例

- ・時代の区分は『四庫提要』等を利用した便宜的なものである。
- ・数字は各略号中に見える著者書物の引用総数である。
- ・薄灰色は単行本未現存のものを指す。
- ・著者名中の呂氏は呂本中と呂祖謙の両者を指す。
- ・略号は以下の通り。

現は現存書、永は永樂大典、吳は吳澄、俞は俞阜、程は程端學、鄭は鄭玉、李は李廉、汪は汪克寬、趙は趙汭、黄は黄震を指す。詳細は本文を参照。

表 B

	著者	本貫	書名	四	永	備考
四庫存目	—	—	左傳節文	○		旧題歐陽脩編
	—	—	道統	○		序云劉絢所作
	李石	資州	左氏君子例等	○		『方舟集』所収
	—	—	通論	○		
	李鑾孫	—	握奇圖	○	○	『大典』卷9197
	黃復祖	吉州	經義問對	○		『大典』經義か
	楊維禎	—	春秋合題著説	○	○	元朝。『大典』卷9198～9200
	晏兼善	—	透天關	○	○	南宋。『大典』卷9192～9196
	—	—	四傳	○		
	—	—	麟經指南	○	○	『大典』卷9196～9197
大典春秋部	—	—	名義		○	『大典』卷9160～9167
	—	—	綱領		○	『大典』卷9168～9169
	—	—	十二公始末		○	『大典』卷9169～9173
	—	—	年表		○	『大典』卷9174～9175
	—	—	傳註		○	『大典』卷9176～9186
	—	—	地名		○	『大典』卷9187
	—	—	國名		○	『大典』卷9188
	—	—	圖象通釋		○	『大典』卷9189
	—	—	通訓		○	『大典』卷9190～9191
	—	—	辯疑		○	『大典』卷9201～9203
	—	—	講義		○	『大典』卷9203～9206
	—	—	經疑		○	『大典』卷9207～9208
	—	—	春秋策		○	『大典』卷9208
	—	—	春秋經義		○	『大典』卷9209～9211
	—	—	詩文		○	『大典』卷9212

凡例

- ・四庫存目は『四庫提要』存目所収の書籍を指す。
- ・大典春秋部は『永樂大典』所収の書籍を指す。
- ・備考は『四庫提要』の記事と『永樂大典』所収巻数を指す。
- ・略号は以下の通り。

四は四庫提要存目、永は永樂大典を指す。